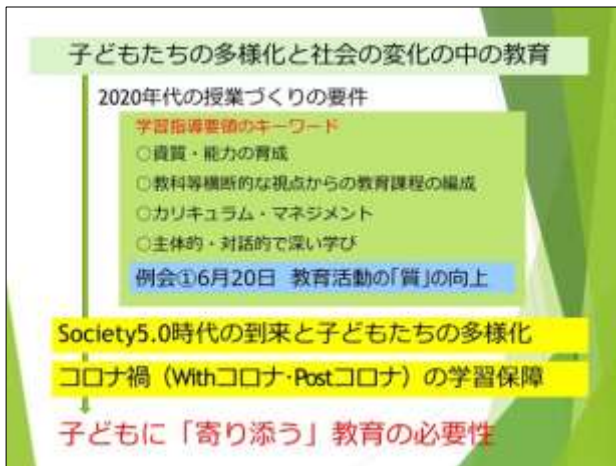


新型コロナウイルスの再度の感染拡大が連日、報道されている。収束への期待が薄れると同時に学校の休校が再び行われるのではないかと不安になる。新しい生活様式で、子どもたちも教職員もこれまでと異なる学校生活を強いられている。とりわけ、密閉空間・密集場所・密接場面を作らない、いわゆる 3 密を避けることが強調されて久しい。学校現場では、この 3 密とは真逆の様相があるので、当初から、困惑している。

一方、今年度から小学校では新学習指導要領による教育が実施されている。どのような社会の変化にも対応できる子どもの育成を目指し、資質能力の育成や教科等横断的な視点からの教育課程の編成、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学びなどが改訂のポイントに挙げられている。



我々は、Society5.0※に代表されるように、これからの時代を生き抜く子どもたちの育成のために、2020 年代の授業はこれらのポイントを確認にしていきたい。この学習指導要領のスタート期に、誰もが予想もしなかった新型コロナウイルスへの対応を迫られ、感染防止の観点から授業づくりの当たり前を根本的に

見直すことになった。

学校では物理的に近い距離が取れない状況の中、せめて子どもたちとの心の距離を縮めたい。このコロナ禍だからこそ、教師は子どもたちの近くに居てほしい。今だからこそ、子どもに「寄り添う」教育を望む。しかし、「寄り添う」は、耳ざわりのいい言葉で行政や福祉、医療、教育などの分野でよく使われるが、考えてみれば抽象的で曖昧な言葉である。

「寄り添う」を自分の言動として表現することができなければ、授業づくりや学級づくり、子どもたちの指導・支援につながらないのではないかと考える。結果、見捨てないことが寄り添うことかもしれないが、子どもの姿や事実から寄り添い方は変わっていく。大切にしたいのは、教師の寄り添う心であり、子どもの心に寄り添う在り方である。今後の学級づくりや授業づくりの前提にしたい。(芝)

子どもに寄り添える教師（案）

- ・子どもの成長を心から喜び合う。
- ・言うことと行っていることが一致している。
- ・表情が温かく、子どもが話かけやすい空気感やユーモアを持っている。
- ・感情的になることが少ない。
- ・楽しく魅力ある授業にしようと努力している。
- ・子どもとともに学級を創ろうとする言動が多くある。

など。